

論文

清水幾太郎のオーギュスト・コント解釈

— 社会的現実と「歴史哲学」への志向をめぐる —

庄 司 武 史*

はじめに

周知のように、オーギュスト・コントの思想は、社会学の体系を確立したものであると同時に、人間社会を過去から未来へと俯瞰して、現在のあるべき姿を謳った壮大な歴史哲学であった。その歴史哲学は彼の実証哲学そのものが余すところなく包含しており、とりわけ「三段階の法則」(la loi des trios états) や、進歩と秩序を旨とした社会観はよく知られている。

清水幾太郎に影響を与えた思想はいくつかこれを挙げることができるが、こうしたコントの思想と生涯とに、清水はとくに親しんだ。だが、多少でも清水の業績を知るものならば、そこにコントやコントに強い影響を受けた建部遯吾が説いたような壮大な社会学や思想体系がみられないことは、直ちに想起されるであろう。そこで、清水とコントとの思想的関係はどのようなものであったのか、という疑義が生じる。清水の思想や社会学におけるコントの存在感は夙に知られており、それが清水の思想の基礎的意義を有することは十分、考えられることであるにもかかわらず、両者の関係を詳しく整理した研究は、これまでほとんどみられなかった⁽¹⁾。

最近は大久保孝治や竹内洋の清水論⁽²⁾が注目されつつあるが、両者とも清水の思想的基盤の検討にはあまり注力していないのであって、本稿は、上記のような疑義の検討をとおして先行研究の不備を補完し、清水の思想や社会学の概要を改めて整理することを意図している。

その際、本稿では、これまでの筆者の研究を踏まえ、予め次のような分析の視点を想定しておきたい。すなわち、第1に、清水における現実の社会的諸問題に対する視線と解決への志向の基礎はコントを機に形成されたこと、第2に、似たような印象を伴う言葉なのでためらいがちにはあるが、コントを機に「歴史的必然」ではなく「歴史哲学」を志向する清水の歴史観が形成されたこと、である。本稿は、コントおよび他の思想家との関係も踏まえ、上記の視点から清水のコント解釈への接近を図るものである。

1. 清水以前のコント研究

— 西周と建部遯吾

昭和時代の清水のコント解釈に入る前に、清水以前の明治から大正におけるコント研究につ

*早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程3年
早稲田大学社会科学総合学院 助手

いて、とくに西周と建部遜吾を取り上げて簡潔に整理しておきたい。建部遜吾は、清水以前にコントを取り上げた最大の社会学者であり、明治末期から大正初期にかけて著した『普通社会学』において、コントに倣った壮大な社会学体系を構築した。一方、西はコントとその総合社会学を日本に紹介した明治の哲学者であり、建部はその孫弟子筋にあたる。建部からみれば、自らの弟子である戸田貞三に学んだ清水は孫弟子にあたるのであって、そこに、明治の西から明治・大正の建部を経て、昭和の清水に至るコント研究の一連の流れをみることができるだろう。清水の前に、西と建部のコント観を確認しておくことは、両者に対する清水の批判の視点が奈辺にあったかを確認する上でも重要である。

この際、念頭に置いておかなければならないことは、明治から大正にかけての日本社会学の黎明期ともいえる時期のコント解釈は、専らその進化主義的側面が強調されて取り上げられる傾向にあったという点である。コントが社会学を「社会動学」と「社会静学」とに区分し、前者を進歩や進化の学として、後者を秩序の学としたことはよく知られており、また、“l'Ordre pour base; et le Progrès pour but”（秩序を基礎とし、進歩を目的とす）というコントのモットーからも分かるように、コントの学説から摂取すべきは進歩や進化の側面だけではないはずであった。しかしながら、たとえば、ここで取り上げる西や建部にしても、主にコントの「三段階の法則」を念頭に置いた学説を展開しているのであって、彼らが活躍した富国強兵という時代の要請を考慮しても、そのコント解釈には一定の制約や偏りが生じていたことは認めなければな

らないだろう。秋元律郎が建部について指摘したように、進化主義への強い同調は国家の進運と重なりやすい〔秋元 1979: 60-64〕。後に高田保馬によって厳しく批判された建部の「国家社会学」というあり方（1921年の『国家社会観』等）も、建部がコントの「三段階の法則」に強い影響を受けてのことであって、あまりに日本の国情に引き寄せ過ぎた結果、却って学問的な冷静さを欠くことになったものとみられる。

高田の『社会学原理』（1919年）によって、建部らの社会学とは一線を画された世代に属する清水は、コントへの関心といっても、もとより西や建部への回帰を意味したのではない。すなわち、コントを進化主義的にのみ解釈したのではなく、また、秩序にのみ傾くのではなく、現実の社会問題に志向するという、むしろ社会学本来の機能や実践性との関係で解釈したのである。以下では、このことを念頭に置きながら、西と建部のコント観を整理することとする⁽³⁾。

さて、幕末にオランダに留学し、その地でコントを知ったとみられる西周は、コントへの関心をとおして、日本が諸外国に後れをとらないよう西欧の学問、技術、諸制度等をいかに移植するかに注目し、その際、主たる障害になるものとみられた儒学、国学および日本人の精神的風土を批判することを目論んでいた。西は、儒学の停滞性を「漢儒」の「泥古」と呼び、その改革を訴えたが〔西 1870- = 大久保編 1981: 182〕、その際、西が依拠したのがコントの「三段階の法則」であった。西は、コントを「実理上 哲学 Positive Philosophy」〔*Ibid.*: 181, ルビは原文〕の祖とした上で「此ヤーコストより初て実理上の学に至れり。其説に three spaces とて、事物の開けは神、空、実の三ツの場合を踏にありと言

へり」と紹介する [Ibid.: 181]。ここから西は、人間の精神や学問は本来、進化するものであることを主張した上で、「清儒の考証学の如きも此上に実地の考証を加えるときは大いに好かるへし」 [Ibid.: 182] として、それを失った漢儒の停滞性を克服するため、実証的なあり方の採用を提起するに至る。

理由は詳らかでないものの、西は元来、進化主義的なものの考え方をしていたようで (1868年頃の「末廣の壽」等)、人間社会の進行を進歩や発展という観点から眺めた「三段階の法則」は、とりわけ共鳴の度が強かったものとみられる。西がそこから、日本の今後の進運のため、「漢儒」の「泥古」をコントの学説を利用しながら克服しようとした意図は酌むことができるとしても、たとえばコントの原著ではなく、通俗のコント解説から得た偏った知識のみ依拠したために [西 1873=大久保編 1960: 41,67]、進化主義的側面以外の諸特徴への目配りに欠け、コントの学説が持つ実践性を必ずしも十分に摂取し得なかったことは批判に値するであろう。

一方、建部遯吾もまた、西に劣らず進化主義的思考を好む傾向がある。当初、哲学を志していた建部が『哲学大観』(1898年)で語ったところによれば、当時、建部の関心を捉えていたのは、人間と社会の進歩に関する根本的な原理を知ることであった [建部 1898: 32-33]。建部はこうした関心のもと、古代から近世に至る哲学史を追っていくのであるが、建部にその歴史は、普遍的・統一的な体系が特殊の諸形式に分解していく過程と映る [Ibid.: 105]。したがって建部は、その過程で提示されてきた数々の根本的原理と称するいずれにも、「是れ標準的

原理なり、是れ抽象的原理なり、而して亦是れ形式的原理なり」 [Ibid.: 28, 強調原文] として不満を表さざるを得なかった。そこで注目されたのがコントである。

「コント乃ち此流弊を看破して学問の統一を唱説し、学問の目的は社会人生の理想の研鑽に他ならずして、学問の面目は一切の迷忘を離れ、堅確なる事実の上に理論の構成を樹立せる知識の体系に他ならざるを立説せり」 [Ibid.: 105, 強調原文]

哲学時代にコントの重要性に着目し、自らの抱負を「僕は物的心的合一論的立脚地に立ちて社会学説を樹てんと擬す」 [建部 1902=1989: 338-339] と語った建部の社会学の全体系となったのが、1904年から1918年の14年間にわたって書き上げられた、『普通社会学』全4巻である。建部が「コムトの社会静学及社会動学をいえる、其包含に少差あれども、本文体系構成の一淵源たることを争う可からず」と述べているように [建部 1904: 142]、全篇をとおして、とくにコントの『実証哲学講義』が参照されている。ただ、建部はそれを祖述しただけでなく、自らの儒学の素養と結びつけて独自の体系を構築した。ここでもコントの「三段階の法則」が取り上げられるのだが、建部はこれを「三段階五相」という社会進化論に組み直し、近代日本をこのうちの第二段階である「懷疑=空理、個人本位、民本自由」の段階にあるといい [建部 1941: 5]、具体的には個人主義、自由主義、私欲主義によって社会全体が破産の危機に瀕していると主張する。建部によれば、実はコントこそ、この段階を導いた「予言者」であり、これへの批判をとおして第三の「批判=実理、社会本位、国

本協同」の段階に進まなければならない。そして、この第三段階を導く者こそ、ほかならぬ建部自身であると述べる [Ibid.: 5]。

しかし、ここで注意しなければならないのは、建部が大いに参照したはずのコントは、自身の実証哲学を、少なくとも建前は人類に普く体系と位置付けていたのに対し [Comte 1822 (霧生訳 1970: 111)]⁽⁴⁾、建部がそれを取り入れたときには、日本の進化を鼓吹する偏った見解の裏付けに利用されてしまっていたことである。日本社会学の役割を「日本や亦第廿世紀宇宙内思想界の覇者として当然の要求を有する者、(中略) 日出づる処に位する扶桑大帝国は来らんとする世紀に於ける世界の光明たる託命と責任とを有す」[建部 1898: 368-369, 強調原文]と考えていた建部にとって、「民本」ではない「国本」の「国家社会学」の整備を主張することは自然であったかもしれないが、高田保馬が批判したように、それはもはや社会学という科学ではなく、国家主義というイデオロギーであった [高田 1919: 16]。後にコントの研究書も著した本田喜代治は、学生時代に列した建部の講義の内容について、「こんなものを社会学というのかどうか知らない」[本田 1970: 147]と回想している⁽⁵⁾。

以上、概観してきた西と建部とについて、清水が自らの研究のなかで、とくに大きく取り上げたということはない。少なくとも、コントとの関係での言及はほとんどないといってよい。建部については、1935年の『社会と個人—社会学成立史—上巻』および1936年の『日本文化形態論』において、わずかに触れられているが、いずれも社会学の成立をめぐる諸学説の整理の過程で、先行研究のひとつとして取り上げられ

たに過ぎない。清水以前にコントに関心を示した両者に対する清水の反応は沈黙なのである。

だが、こうした沈黙そのものが、清水の態度を如実に示しているとみるべきである。清水は、コントの学説における人間社会の進化主義的側面に、とくに大きな関心を払わなかった。清水がコントの学説から得たのは、西や建部らが注目したような日本の発展に役立て得る壮大な歴史哲学・総合社会学的な知見ではない。そうではなくて、清水はあくまで、現実の社会問題を志向するという社会学本来の機能や使命との関係でコントの学説を受けとめているのである。そのことを、次にみていかなければならない。

2. 清水におけるコント受容の過程

1923年、関東大震災で被災した清水が、その後のさまざまな出来事のなかで社会問題への関心を深め、社会学を志すに至るのは、旧制中学にあった16歳のときである。大正期の社会科学を代表する思潮は社会主義と形式社会学とであったが、そうした時期に社会学を知った清水もまた、これら思潮の洗礼を受けることになる。

第1の社会主義については、幼年期から続く清水家の生活の厳しさが背景にある。元武家であった清水家は、明治維新の過程で次第に没落し、清水が幼い頃は小さな商売が生活を保っていたに過ぎなかった。それも、関東大震災で一切が失われ、清水は後に東京帝国大学に進んでなお、学費に苦勞するほどであった。清水の社会主義への関心は、当初、アナーキズムの大杉栄らに示される。それは、時代の流れもあっ

て、やがてマルクス主義への接近に変じていくが、その素地ともいえる経験は、日々の苦しい生活や大杉への関心のなかで培われていた。第2に形式社会学についてであるが、いうまでもなく、清水ははじめから形式社会学に限定して関心を持っていたわけではない。清水は社会学を知った当初、高田保馬の『社会と国家』を読んでいるが、これはこの文献が前年の1922年に刊行されたばかりの、いわば新刊であったためである。また、ゲオルグ・ジンメルやヴェルナー・ゾンバルトらドイツ形式社会学方面の文献にも触れているが、これも社会学者・赤神良譲から紹介された結果であって、形式社会学の洗礼というのは清水の主体的な選択というよりも、当時の社会学を取り巻く状況が結果としてそうさせたに過ぎない。しかしながら、清水がコントを知るより前に、ドイツ系統の社会学や思想とマルクス主義とに先ず触れていたことは、この後、清水がコントの研究に向かうにあたっての、ひとつの重要な契機をなすことになる。

清水は旧制の東京高等学校を経て、1928年から1931年まで東京帝国大学文学部社会学科に在学したが、コントへの関心を本格的なものとしたのは、その最後の時期にあたる。卒業論文の作成を控えたある日、清水はコントの総合社会学をそのテーマに決めたという〔清水 1970: 7等〕。その背景を、上で整理してきた清水の道のりに徴して、2点ほど確認しておこう。

第1に、清水をマルクス主義の学説に傾かせた生活の厳しさは、同時に、清水が自らの経験をもとに社会の現状を問題として捉え、その解決を志向する方向に意識を向かわせることにもなった。清水は大学入学当時を、現在では想像

できないほどの貧困や失業や不安が社会全体を蔽っており、「私たちは、自分がマルクス主義者であると思わなくても、その用語を使わなければ、現実を説明することが出来ない、そういう立場に追い込まれていた」と振り返っている〔清水 1978 = 著作集18: 16-17〕。清水は必ずしも完全にマルクス主義に同調したわけではなかったが、そこから受け取った、さまざまな社会問題に対する説明と解決の能力は、社会学もまた備えるべき本来の機能として重要視するところとなった。清水が大学入学時に、社会学科の主任であった戸田貞三から投げつけられた「社会学は社会の改革や改良とは何の関係もない」といった趣旨の言葉に慚然としたことは有名であるが〔清水 1956 = 著作集10: 359-360, 清水 1975 = 著作集14: 220等〕、それはこうした清水の意識が基底にあってのことである。

したがって第2に、そうした清水にとって、当初から慣れ親しんできた形式社会学は次第に不満なものとなっていった。日本では未だ、形式社会学が「新しい」科学的な学説とされていたが、清水にとっては「ドイツの学説の非現実性というか、如何にも浮世離れしているのを不満に感じる」ものであった〔清水 1978 = 著作集18: 16〕。形式社会学の抽象性に対する批判からドイツに現われた文化社会学が、日本でも取り上げられるようになるのは1930年代に入ってからであるが、清水のこうした不満が、人間の生活全体に訴え、現実的関心を失っていないと思われた、しかし学界の趨勢からは「古い」コントの学説に接近させた契機であった。

上記の過程を後に振り返った清水自身による複数の回想を総合すると、清水がコントの学説に惹かれ、その研究に取り組んだのは、それが

「古典的・包括的な歴史哲学的体系」を備えていたためとまとめられる。筆者が冒頭で提示した2つの視点を一言でいえば、これである。コント自身は、「この哲学の主な特徴は、論理的にも科学的にも、常に歴史的・社会的観点が支配することにある」といっているが [Comte 1844 (霧生訳 1970: 147)], 次節以下では、こうした視点を軸とした両者の関係を検討する。

3. コントと現実の社会的問題への志向

よく知られているように、コントの歴史哲学・総合社会学は、過去から未来への人間社会の進行を歴史的に叙述した精神史であるとともに、それを踏まえて現在の人間へ具体的な行動の方向性を示す実践的な指針でもあった。『『実証的』という根本語は、無用に対立する『有用』を意味する」 [Comte 1844 (霧生訳 1970: 178)] と述べたコントが、「人類の主な活動は、(中略) 現実の諸法則全体が許す範囲内で、人間自身の個人的あるいは集団的自然を絶えず改良することである」といい、また、「健全な哲学にとっての最大の問題は、常に極めて素朴な現象に関するものであって、(中略) 常に具体的なものに関心を持つ」と述べたように [Ibid.: 169, 181], コントの歴史哲学・総合社会学は人間社会の生活に向けられたものである。コントは、24歳のときの論考「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」(“Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société”, 1822年、以下「プラン」) ではじめて、こうした考えの全体像を示した。これがさらに、1830年から1842年にかけて出版された『実証哲学講義』(“Cours de philosophie positive”) において体系化

されたわけであるが、こうした過程でコントは、経済学のような個別社会科学を否定し、一切の社会科学を社会学のもとに包括する構想を企てる。これが後に「実証哲学」としてまとめられる体系であるが、清水がいう「古典的・包括的」とは、コントやスペンサーらの時代に企てられた、政治、経済、宗教、文化などの一切を包括的・総合的に観察する、社会学のこうしたあり方を指している。ただ、コントによれば、現代はまだ、一切の社会科学が実証哲学として包括される「実証的段階」に至っておらず、社会学の実証化によって実証的段階に昇る手前の段階にある。たとえば「プラン」の時点でのコントの当面の目標は、社会学(このときは「社会物理学」と呼ばれていた)を実証化するための方策を講じることであったが [Comte 1822 (霧生訳 1970: 134-139)], それは1842年に『実証哲学講義』全6巻が完成したことで、一応の達成をみたと考えられている [Martineau 1853=2009 vol.2: 549]。

コントの場合に注目されるのは、その哲学を実現するために求められる実践的過程を、詳細かつ具体的に論じたことである。多くのコント研究者も指摘しているように、この点がコントとコント以前の社会思想家、たとえばサン・シモンやシャルル・フーリエらとの大きな違いであった [Lenzer 1975=1998, Pickering 1993等]。元来、コントには、フランス革命後の社会の無秩序を收拾させるという強い意識がある。過去、社会秩序の再建設が失敗に終わってきた背景を分析したコントは、それが、秩序を建設する側の行動のみへの注目と、その反面としての理論の軽視にあるとみており [Comte 1822 (霧生訳 1970: 67)], コントが考えた実証哲学は、

再建設に向けた行動を成功に導くための実践の理論であった。たとえばコントが『実証哲学講義』で「行動の真の源泉」[石川訳 1928: 52]と述べた「予見」(「合理的予見」“la prévision rationnelle”)は、何らかの行動をとろうとするものは、その行動が向かう先である対象の現在の姿にではなく、未来の対象の姿に対する何らかの予想を持っていなければ、いかなる行動も起こしえないと考えられているものであって [Martineau 1853=2009 vol.2: 533], コントの実践的な意図を支える必要欠くべからざる概念となっている。清水は『社会学批判序説』において「予見は実践を離れては理解せられぬと共に、実践は凡べて何等かの意味に於ける予見を含まずには成立し得ない。コントが予見の可能性、必然性を主張すること自身が彼の実践的な意図を暗示するものではないであろうか」[清水 1933=著作集 1: 68]と述べ、そうしたコントの意図を受け容れている。「プラン」を一読しても明らかなように、コントの学説は極めて強い実践性を有しているのであって、コントの歴史哲学・総合社会学が包括的であることを目指すのは、こうした行動的な実践性を全体的・具体的に確保するためである。

コントはこうした包括性を「科学的」と呼んだが、周知のとおり、社会科学の歴史はコントの意図を超えて個別化、専門化、高度化の道を辿ったのであって、それは清水がコントの研究をはじめた1930年代には相当、進行しており、コントの学説を「科学的」とする評価はすでに失われていた。ただ、さきにも述べたように、清水はコントに関心を寄せることで、単に社会科学の包括・総合といった方向でコントの復権を企てたわけではない。清水が形式社会学の抽

象性に対する不満からコントに進んだ経緯からもうかがえるように、包括・総合の目的であるところの実践性に対する強い意識が、清水を惹きつけたと考えるべきであろう。清水が、たとえば「コントの社会学は、形式社会学と異なり、一切の社会現象を残りなく包括する。このことは、それが人間の生活の全体に訴え、彼に行動の原理を提供することを意味する」[清水 1949=著作集 6: 427]といい、また、「第一に、コントの社会学説は、古典的な体系であった。(中略)後代の学説には見られぬ具体性、現実性、歴史性が生きていた」[清水 1970: 9]というとき、それは清水がこうしたコントの意図を「古典的・包括的」という言葉とともに受け容れていたことを示している。

ここで併せて考えるべきことは、清水がコントの学説から受容した実践性への意識が、現実の社会的問題に対する視線と解決への志向の基礎として形成される契機となった点である。というのは、これも周知のとおり、コントの歴史哲学・総合社会学そのものは、個別具体的な社会問題を取り扱う性質のものではない。したがって、清水がコントの学説に「現実の社会問題解決や人間救済への関心」[清水、高橋 1970: 6]や「現実的関心」[清水 1975=著作集 14: 230]といったものを見出すとき、私たちはコントを素養としながらも、それにより現実的な影響を付け加えた存在を想定しなければならない。

筆者はこれまで、清水の思想や社会学におけるジョン・デューイのプラグマティズムの影響に注目してきたが、ここでも、デューイの影響を想定することが可能であるように思われる。というのは、清水がデューイの影響のもとで形

成した、筆者がこれまで「現実関与の論理」と呼んできた志向が、上記のような「現実の社会問題解決や人間救済への関心」や「現実的関心」に導いたと考えられるからである。ここで「現実関与の論理」の概略のみ掲げておこなうならば、清水の思想や行動には、現実や社会を固定的なものともみず、人間の力によって変更し得る可塑的なものとして捉え、積極的に関与していかうとする論理がはたらいており、清水は知識人として、社会や現実への積極的な関与を社会的に、あるいは思想的に終生、説き続けたばかりでなく、自ら社会や現実に関与することで、社会や現実を構成する一員としての役割を果たし、必要に応じてその改善を図ろうとする行動をしばしばとっている、といった趣旨のものである。デューイは1917年の「哲学復興の必要性」(“The Need for a Recovery of Philosophy”)において、哲学が取り組む問題を「哲学者の問題」と「人びとの問題」に区別した上で、「哲学は、普通の人が自らの困難と苦闘する際の知性の上に負わされた重荷を取り除かなければならない」として、「人びとの問題」の解決に貢献すべき哲学の役割を強調したが [Dewey 1917: 66]、清水の現実への対し方の背景には、デューイの影響が強くあるのである。

清水がデューイのプラグマティズムから現実の可塑性などの概念を受容したのは、コントの学説の研究をはじめから数年後の1935年のことと考えられるが、ここでみてきたような現実の社会的問題に対する視線と解決への志向は、コントの古典的・包括的な社会学から得た社会的実践への志向を素養とし、デューイのプラグマティズムから得た社会的現実への積極的な関与の論理で補強されることで自覚されてきた思

想と考えることができるように思われる。

4. 清水社会学の性格

だが、清水のコント解釈はそこで完成したわけではなく、戦後の研究の過程で発展し、清水の社会学として一定の形成をみる。戦後の清水のコント研究は、『社会学講義』(1948年)や『オーギュスト・コント—社会学と何か』(1978年)が代表的であるが、後者は岩波新書の一冊ながら、膨大かつ詳細な注と内容の水準の高さなどから、学術的業績のひとつに数えるに足るものである。ただ、併せて考慮する必要があるのは、この著作が書かれるに至る軌跡であって、ここでは、その出発点を『社会学講義』に求めることから始めたい。

1945年の敗戦後、民主主義についての言論が急激に増えたなかで、清水はしばしば歴史について言及している。戦前的な諸価値の崩壊のなかで、自らの内部に根拠を持つ歴史観や歴史哲学が失われ、マルクス主義が説くような歴史的決定論に安易に寄りかかり、却って根の浅い、軽薄な言論が多くなったことに警鐘を鳴らした内容である。たとえば1946年の「デモクラシーの流行」にみられる、「古い秩序から新しい秩序への進行は、歴史的必然によって約束されている。併し歴史の法則に安心していることが如何に危険であるかは、既に幾多の経験がこれを示している」[清水 1946=1951: 27] といった言葉は、歴史的必然への懐疑を顕著に表している。ここで清水は、歴史的必然に寄りかかる人間への懐疑を示す反面、人間には歴史を作る能力があって、現代はそれをこそ必要としていると主張する点で「私は今もなおコントの弟子で

あると思っている」と述べている [Ibid.: 27]。

『社会学講義』は、清水のこうした関心のもとで著されているのであって、本書の冒頭で述べられた次のような言葉は、清水の古典的・包括的体系への関心を如実に表しているといえる。

「吾々は社会学の場合にあってはその古典的形態の有する打ち消し難い魅力を到底無視することが出来ないのである。人類の巨大な発展過程に於ける吾々の地位と意義とを明らかにし、吾々の前方に将来社会の姿を明確に描き出し、更に進んで吾々の政治及び行動の原理を示すところの社会学は、その後の夥しい批判にも拘わらず、吾々の心に強く迫るものを含んでいる」[清水 1948=著作集7:29]

このとき、清水が社会学の古典的形態と対比して、その課題を問うているのが、科学としての社会学あるいは特殊社会学や個別社会学など様々な名称で呼ばれる近代の社会学である。それらを清水は5つの傾向に整理する。第1に歴史哲学的な傾向、第2に人類学あるいは民族学に近い傾向、第3に心理学的あるいは社会心理学的傾向、第4に形式社会学的傾向、そして第5に社会調査的傾向である [Ibid.: 17-20]。いうまでもなく、第1の傾向こそコントに代表される歴史哲学・総合社会学的な系譜であり、第2から第5の傾向はそれの批判の上に成り立ってきた歴史を少なからず持っている。しかし、清水はこれら第2から第5の傾向の社会学を、その意義は認めながらも批判する。その際、清水の基本的な立脚点となっているのが、社会学における現実の社会的問題に対する視線と解決への志向という機能である。

「社会学にとって最も肝要なことは、現実の社会生活のうちに問題を発見し、その時代の科学的方法を以てこれを処理しようと試みることに尽きる。(中略)換言すれば、現実の社会的経験の内部で問題に巡り合い、経験の統制と組織という方法を用いてこれを克服しようと努力する、これが社会学の殆ど一切である」[Ibid.: 25]

こうした観点に立った清水にとって、第2と第3の傾向は他の社会科学と区別がしにくく、第4の傾向は社会学の対象が具体的な問題そのものではなく、科学的とされる方法で抽象化されて取り扱われる懸念がある、などと批判されることとなる。清水は、社会学が登場してから現在に至るまでの社会学史を、「当初の歴史哲学的総合的な形態から経験的な特殊科学の形態へという運動は、凡ゆる差異と分裂とを貫いて看取されるものであり、またこれと結びついて、直接的に行動の基準を与える形態から実践を断念した理論的形態への変化」と考えており [Ibid.: 28]。ここからうかがえるように、当時の清水においては、過度に理論化した社会学が斥けられる反面、社会学の歴史哲学・総合社会学的体系、すなわち第1の傾向のようなあり方に対する称揚が認められるのである。

ただ、ここで併せて注意しておく必要があるのが、第1の傾向と並んで、第5の社会調査的傾向が注目されていることである。いうまでもなく、この社会調査を核とする社会学は、戦後、アメリカ社会学の流入とともに日本に紹介が始まった傾向であり、「科学的且つ現実的な関心を刺激する社会現象」[Ibid.: 21]のほとんどを対象として、その実際の調査から得られた

知見をもとに研究を進める方法である。したがって、極めて高い実証性と現実性を伴った有益な成果が得やすい反面、清水によれば、社会や生活の全体というよりも個々の事象のみを対象とした特殊個別的な水準にとどまりがちで、総合的な視角に欠けている点が批判されることになる。しかし、清水はこの特殊個別的な性格をむしろ奇貨として、「コントが少々傲慢な態度を以て社会学のうちに包み込もうと欲した社会現象の全体が隈なく社会学者の観察の対象となる」事実を評価する [Ibid.: 160]。歴史哲学・総合社会学的な社会学の体系に対する批判をとおして発展してきたアメリカの社会調査的傾向に、再度、歴史哲学・総合社会学的な視角を求めるのは困難であろうが、これら特殊個別的な研究の成果が持ち寄られたとき、「結果として」コントが要求した包括的な全体に接近するのではないか。これが、第5の傾向に対する清水の期待である。

すなわち、この頃の清水が社会学に認めた一般的性格は、第1の傾向と第5の傾向とを統合したものであり、換言すれば、歴史哲学・総合社会学的な側面と実証的・現実的な側面と両方を兼ね備えた機能を果たすべきものであった。清水は本書の結論部分において、読者が基本的にはアメリカ社会学に代表されるような「具体的な社会現象の着実な調査研究に進むこと」を願った上で、人間の欲求と観察の結果とを説明し、総合する古典的体系との協同を訴える。

「一方に於いては、相互に対立する欲求を外部化して要素に分解し、共通の平面の上で調和するという可能性が生れ、他方に於いては、自己の欲求を弁明或は合理化すると共に時として暴力を以て

その充足を実現しようとする可能性が生れる。二つの可能性の中間に、乃至は両者の部分的結合として現実の行動の大半は営まれているのであろう。そして社会学は二つの可能性と結びついて夫々異なった役割を果たすことになる」 [Ibid.: 324]

この「夫々異なった役割」のひとつがアメリカの社会調査的傾向であり、もうひとつが歴史哲学・総合社会学的な古典的体系である [Ibid.: 325]。かくして、総合的・歴史哲学的な側面と実証的・現実的な側面と両方を兼ね備えた機能を有することを目論む清水の社会学の一般的性格は、ここに一応の形成をみる。このような清水の社会学の性格を、また別の側面からみるならば、東京帝国大学の学生時代から清水の関心の中心をなしているコントの歴史哲学・総合社会学的な体系と、1935年以降に受容されたプラグマティズムの思想から得た知見とが、『社会学講義』をひとつの契機としてまとめ上げられたものといえるのである。

5. 「歴史哲学」への志向

前節まで検討してきたように、清水はコントの学説をとおして、「古典的・包括的」な体系のうちに現実の社会的問題に対する視線と解決への志向を形成した。また、清水が現実の問題を取り扱う場合、現在の状況のみに関心を示すだけでなく、過去の歴史を踏まえた上で、未来における展望にも言及する議論の仕方を好むという点でも、コントの歴史哲学的な思考方法の強い影響を受けているといえる。清水は大学時代からの関心を振り返ったとき、「一つは、歴史哲学、つまり歴史への関心です。自分の時代

を歴史という時間的連続のなかにどう位置づけるかという問題です。現代的関心と言いかえても、そう間違いないと思います」と述べている[清水, 高橋 1970: 2]。すなわち、清水がコントの学説を「歴史哲学的体系」とみるとき、それは現実の社会問題に対する説明と解決とに方向を与えるため、過去への配慮と未来への予見とを踏まえて現在と向き合うという科学のあり方を、コントから受容していたことを意味している。

ただ、ここで注意したいのは、清水はこうしたコントの歴史哲学的な観点を受容し、また、マルクス主義思想に関心を寄せた時期もあったけれども、一切を歴史の法則が決定するという歴史的決定論あるいは歴史的必然の理論には、決して与しなかったという点である。清水はまた、歴史がただひとつだけの軌道を持つものとする考え方も、「歴史にはこのような唯一の軌道もなく、必然性を伴う法則もない」として、断固、斥けるのであって[清水 1940 = 著作集 5: 182], 清水はつまり、唯一かつ必然的な歴史法則が人間および人間社会の一切を決定するという主張を拒否するのである。両者は似た言葉であるが、コントの学説を歴史哲学的と呼ぶならば、コントが説く歴史哲学のあり方と、たとえば公式的マルクス主義が説く歴史的必然の理論とは、ここでは厳然として区別する必要がある。

では、清水においてコントの歴史哲学はどのように理解され、マルクス主義的な歴史的必然の理論とはどのように区別されているのであろうか。ここでは、清水の歴史観を考える際のポイントとして、それが人間の願望や努力によって「作られる」ものとして捉えられていること

を指摘しておきたい。

先ず清水の歴史への意識であるが、清水が社会学を知った頃はまだ、あまりそれへの意識は強くなかった。形式社会学はそもそも歴史への意識が希薄であり、当時のマルクス主義の歴史観も、まだそれほど教条的なものではなかった。コミンテルンの決定が絶対的・教条的なものになりはじめたのは大学入学前後からで、清水はその頃から次第に、声高に資本主義国家の凋落を歴史的必然と説く類の公式的マルクス主義の歴史観に違和を感じるようになったと回想している[清水 1975 = 著作集14: 223-224]。一方、間もなく清水はコントの研究をはじめ、コントの学説にいう「三段階の法則」や「予見」の観念と向き合っていく。周知のとおり「三段階の法則」は、人間の精神が神学的、形而上学的、実証的という各段階を経て進化していくという仮説であって、さきに触れた「予見」の観念とともに、コントの学説の中核を成す思想である。清水は、生家の没落という体験から、元来、時間の進行とともに価値が増加するという「進歩」の観念を無条件に信じることに懐疑的であったが[清水 1956 = 著作集10: 256-257, 清水 1975 = 著作集14: 140-141等], コントの歴史哲学に特段、違和を感じた様子はない。コントが過去—未来—現在という時間的順序を提起したとき、コントの意識はあくまで「現在」にあったことから[Pickering 1993: 563], 必要以上に未来と過去を強調する公式的マルクス主義に比べて抵抗が少なかったとも考えられる。

コントの歴史哲学を知った清水は、公式的マルクス主義が説く歴史的必然の理論との違いを強く意識した。この頃の清水の言葉には、後者に対する嫌悪がはっきりと表明されている。

「一切を必然的な法則の展開と考える見方に対する私の不満は終に抑えることが出来ないところへ来た。歴史の流れに抗することが不可能であるとしても、これに沿って進むことが極めて容易であるかの如く説く思想への反発は明白な形式を持つことが出来るようになった。人間を時代と社会の子として見ることを教える考え方を正面から否認しようと決意した」[清水 1939=著作集4:407]

ここから分かるのは、清水は公式的マルクス主義が説くような歴史的必然を斥け、「人間を時代と社会の子」としてのみ捉える見方を拒否していることである。コントの歴史哲学と公式的マルクス主義の歴史的必然の理論とについて、清水が理解するところの重要な差異はここにある。この頃、清水は「歴史的精神」という論考のなかで、時間の流れの結果である「事実としての歴史」に対して、人間が意味のある歴史として作り直した歴史を「観念としての歴史」と呼んだ上で、次のように述べている。

「人間以外の生物と無生物とが単に事実としての歴史を持ち、これに依って支えられているのに反し、人間はこの事実としての歴史を持つと共に、これを持つことを知るものであり、これに反省を加えるものである。(中略) 一方の事実としての歴史が人間を作るものであるならば、他方の観念としての歴史は逆に人間が作って行くものでなければならぬ」[清水 1940=著作集5:178]

清水のいう歴史が、人間が願望や努力によって「作る」ものと捉えられていることは上にみられるとおりであるが、このような「作る」「作

られる」という考え方はどこに由来するのか。ここでも清水におけるデューイとジンメルの影響を念頭に置いて2点ほど指摘しておきたい。

第1に、これも筆者が過去に検討したとおり、清水がデューイのプラグマティズムから受容して形成した現実の可塑性と、それに基づく人間による現実の可変性、そこから導かれる現実関与の論理といった思想を一貫する視点があるとするれば、それはデューイ受容後に清水が好んで使用した“creata et creans”という言葉にあると思われる。「造られ、かつ造る」を意味するこのラテン語は、清水においては、人間は歴史や社会によって「作られる」存在である一方で、それらを「作る」存在であることが含意されている。1937年の論考「歴史に就いて」では、こうした見方の歴史への適用が企図されている⁽⁶⁾。

第2に、ジンメルから得た「構成」概念の影響である。清水は、形式社会学そのものには批判的であったが、ジンメルにだけは終生、親しんでいた。とりわけ、『歴史哲学の諸問題』(“Die Probleme der Geschichtsphilosophie”, 1892年)は愛読書のひとつであったというが[清水 1949=著作集6:412]、ここから示唆を得た「構成」の概念が重要な役割を果たしている。ジンメルのいう「構成」とは、現実の物事を人間の側の精神的能動性によって作りあげる、まとめ直すといった積極的な認識を意味しているのであって、現実をありのままに受けとめる「コピー」や「模写」といった姿勢とは対極に位置している[Simmel 1892(生松・亀尾訳 1977:73)]。このようなジンメルの考えは、その歴史観にも適用されるのであるが[Ibid.:73]、これに対してジンメルが批判の矛先を向

けるのは、一切の運命が歴史によって決定されているとする見方である。これがマルクス主義的な歴史観を指していることはいまでもなく、本稿での議論を踏まえれば、『歴史哲学の諸問題』という表題の「歴史哲学」は、歴史的必然の理論を指している。清水の次の言葉は、このようなジンメル視点をも基本的には踏襲しているといえるであろう。

「人間は彼を作った歴史に反省を加え、これに拠って自ら主観的活動としての歴史を作る。人間の作る歴史は、人間を作る歴史の模写でなく、却って現代に生きる人間の選択と構成とに基づくものでなければならぬ」[清水 1940=著作集 5:181]

以上から分かるように、清水の考える歴史哲学と人間の役割との関係は、たとえば公式的マルクス主義が考えるように、先ず歴史の流れがあって、そこで果たすべき人間の役割やはたらきが説かれるというものではない。清水が「行為とこれに依る実現とに先立って一つの軌道や法則が存在することは出来ない」と述べるように [Ibid.: 184]、人間の役割やはたらきがあるからこそ、それをより適切な方向へ導くために、人間社会の進展の一般的方向を示す歴史哲学が、一種の指針として必要とされると考えられているのである。さきに確認したように、コントが実践的な歴史哲学を作り上げた意図もそこにあったのであって、人間社会の進行が歴史の法則によって定められているという類の歴史的必然の理論は、清水が生涯を通じて最も忌避するところであった⁽⁷⁾。コントを基礎とし、デューイやジンメルから得た素養を活かして形成した清水の歴史哲学とはこのようなもの

であって、それは人間によって作られ、進められる歴史である。仮に歴史に流れがあるにしても、そこにおける人間の存在と主体的な役割を決して見失わない見方である。

結 び

以上、本稿では、清水が自らの思想や社会学を形成するにあたり、コントの学説をどのように受容し、咀嚼して、創見を付け加えてきたかを検討してきた。

清水がコントに関心を寄せたのは、清水がコントの学説に「古典的・包括的な歴史哲学的体系」の魅力を見出していたからであったが、それは具体的には、清水がコントを機に、現実の社会的問題への志向の基礎と、「歴史的必然」ではなく「歴史哲学」を志向する歴史観とを形成したということであった。

本稿でみてきたように、たとえば清水以前にコントを研究した西周や建部遯吾は、コントの学説を社会進化の理論と受け取ったが、清水はそうではなく、コントが意図したような現代の社会問題に対する説明と解決を志向する理論として、そして人間社会の進行のなかで、人間が主体的な存在感と役割を自覚する理論として受けとめた。だが、繰り返しになるが、コントの学説は個別具体的な社会問題を取り扱う性質のものではない。それはあくまで志向する学説であり、社会科学者の目を現実の問題に向けさせる学説であった。しかしそれゆえにこそ、清水は戦後の『社会学講義』において、個別具体的な性質の強いアメリカの社会調査の成果を取り入れることによる社会学の充実を提案し、そこに、コントの意図の十全なる達成の方途を見出

したのである。社会学の本質を、社会のさまざまな出来事を問題化するまなざしであるとするならば、コントの歴史哲学・総合社会学はそうした志向を疑いなく備えているのであって、その意味でも、コントを社会学の始祖にして泰斗とすることは、依然、正当と思われる。本稿でも取り上げたパーリンやレンツァーは、コントの学説の決定論的性格を批判したが、その意図と志向とを評価することは忘れなかったのであって [Berlin 1953=1969 (生松訳 1971: 188, 231, 286), Lenzler 1975=1993: xxxvi-xxxviii], 清水のコント解釈の特質は、このような理解とともに見出されるべきである。

清水のコント研究の成果は、著作という意味では1978年の『オーギュスト・コント』が最後のものとなったが、清水はこれで自身のコント研究に区切りをつけるつもりはなかったようである。その7年後の1985年、清水は藤竹暁に「この本（『オーギュスト・コント』：引用者注）は、いろいろな事情で小さな本とならざるを得ず、不幸な形で世に出ましたが、出来ることなら、もう一度コントを書き直してみようかと思っております」と語った [清水, 藤竹 1985: 213]。また、『清水幾太郎著作集』第19巻に附された「年譜」によると、亡くなる前年の1987年には、「コントの妻（カロリーヌ）の書翰の一次資料を入手し、解説作業を開始する」とあり [著作集19: 278], コントと向き合う意欲が失われた様子は最後までみられなかった。そうした清水が、「もう一度」書き直したであろうコント研究に触れる機会は、1988年の清水の死によって永久に失われたけれども、しかしなお、われわれには清水が遺したコント研究と引き続き向き合っていく

という仕事が残されている。

[投稿受理日2011.9.24/掲載決定日2012.1.26]

注

- (1) 清水のコント研究に焦点をあてた先行研究には [鈴木 1990] がある。鈴木は、初期の『社会学批判序説』と晩年近くの『オーギュスト・コント』とに極端な対照があるとして、2つの間の解明の重要性を訴えたが、鈴木自身はこの解明に踏み込まず、課題として示されたにとどまる。また、天野恵一は『危機のイデオロギー—清水幾太郎批判』（1979年、批評社）において、清水の戦前のコント研究をファシズムの秩序への加担を鼓吹したものに過ぎないと断罪したが、本稿から示唆されるように、こうした結論は極めて一面的である。
- (2) 大久保は、清水の生涯と他の同時代人における生活史との関連付けのなかで清水像の把握を試みている（「清水幾太郎における原風景—時間・空間・物語」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』2008年第1分冊等）。また、竹内は2010年より中央公論新社のホームページ上で、「メディア知識人の運命—清水幾太郎論」と題した清水論を連載している (<http://www.chuko.co.jp/intellect/>)。
- (3) 以下の社会学史の整理では、最近の宮永孝の詳細な研究 [宮永 2011] のほか、大道安次郎や秋元律郎の研究を参照した [大道 1968, 秋元 1979]。
- (4) 以下、コントの記述を参照する際は次の文献を利用する。「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」『実証哲学講義』『実証精神論』は [霧生訳 1970]。『実証哲学講義』の霧生訳は部分訳のため、必要に応じて石川三四郎によるエミール・リゴラージュ縮訳本の翻訳 [石川訳 1928, 1930] およびハリエット・マーティノーの英訳 [Martineau 1853=2009] も参照した（ただしマーティノーの英訳もコントの原著の縮訳である）。なお、コントの膨大な著述の完全な英訳は未だ定本がない。
- (5) 建部へ批判は以下も参照。松本潤一郎『社会学—学説と展望』（1932年、浅野書店）、林恵海「日本社会学の発展」（1953年、『教養講座 社会学』所収、有斐閣）、新明正道『社会学史概説』（1954年、岩波書店）、最近では川合隆男『近代日本社会学の展開—学問運動としての社会学の制度化』（2003年、恒星社厚生閣）等。

- (6) ただし、歴史的時間の理解は、デューイとコントとで全く異なる。デューイの場合、「現在の活動だけが、真に統御下におかれる活動であることに注意せよ」と述べられたように [Dewey 1922: 184], その哲学の中心は基本的に「現在」である。デューイのいう「未来」は長くて数十年の範囲であって [Ibid.: 184-185], 遙かな過去や遠い未来、人類の進化や人間精神の段階的発展といったものは、はじめから考察の対象となっていないか、少なくとも大きな比重を与えられていない。
- (7) たとえば、アイザイア・バーリンも歴史や社会における人間の自由、選択、行動等に対する責任意識を失わせかねないとして、歴史的必然の理論に懐疑的であった [Berlin 1953=1969]。ただしバーリンは、コントの歴史哲学にも同様の趣旨から懐疑的である。一方、人間が歴史や社会を作るという清水の見方には、選択に対する責任が生じることが含意されている [清水 1948=著作集7等]。

参考文献

清水の主要著作・論考等は、以下の著作集に収められている。

清水禮子編, 1992-93, 『清水幾太郎著作集』, 講談社。

本稿で取り上げた清水の著作・論考のうち、上記著作集に収められているものについては著作集から引用し、[初出=著作集の巻号: ページ数] のように記載した。利用した著作・論考名は以下の一覧に記載している。なお、引用にあたって旧字・旧仮名遣い等は改めている。上記著作集に収められていない著作・論考等については、所定の引用規則にしたがった。

- 秋元律郎, 1979, 『日本社会学史一形成過程と思想構造』, 早稲田大学出版部。
- Berlin, Isaiah., 1953, "Historical Inevitability", *Four Essays on Liberty*, 1969, London, Oxford University Press, 41-117, 生松敬三訳, 1971, 「歴史の必然性」(小川晃一ほか訳, 1971, 『自由論』, みすず書房, 167-293)。
- Comte, Auguste., 1822, "Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société", Paris., 霧生和夫訳, 1970, 「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」(清水幾太郎責任編集, 1970, 『世界の名著36

コント スペンサー』, 中央公論社, 47-139)。

———, 1842, *Cours de philosophie positive*, Paris., 霧生和夫訳, 1970, 『実証哲学講義』(清水幾太郎責任編集, 1970, 『世界の名著36 コント スペンサー』, 中央公論社, 234-333, ただしVol. 4 の第50講, 第51講のみの訳出)。

———, 1844, *Discours sur l'esprit positif*, Paris., 霧生和夫訳, 1970, 『実証精神論』(清水幾太郎責任編集, 1970, 『世界の名著36 コント スペンサー』, 中央公論社, 141-233)。

大道安次郎, 1968, 『日本社会学の形成一九人の開拓者たち』, ミネルヴァ書房。

Dewey, John., 1917, *The Need for a Recovery of Philosophy: Essays in the Pragmatic Attitude.*, New York, Henry and Company.

———, 1922, *Human Nature and Conduct: An Introduction to Social Psychology.*, Edited by Jo Ann Boydston, 1983, *John Dewey The Middle Works: 1899-1924.*, vol.14, Carbondale, Southern Illinois University Press.

本田喜代治, 1970, 『旃陀羅の子』, 法政大学出版局。

石川三四郎, 1928, 『世界大思想全集26 コント実証哲学(下)』, 春秋社。

———, 1930, 『世界大思想全集25 コント実証哲学(上)』, 春秋社。

Lenzer, Gertrud., 1975, *Auguste Comte and Positivism*, New York, Harper & Row, transaction published by Transaction Publishers, 1998, New Brunswick.

Martineau, Harriet., 1853, *The Positive Philosophy of Auguste Comte vol.1 & 2*, London, John Chapman, Reprinted by Cambridge University Press, 2009, New York.

宮永孝, 2011, 『社会学伝来考—明治・大正・昭和の日本社会学史』, 角川学芸出版。

西周, 1870-, 『百学連環』(大久保利謙編, 1981, 『西周全集』第4巻, 宗高書房)。

———, 1873, 「生性発蘊」(大久保利謙編, 1960, 『西周全集』第1巻, 宗高書房, 28-129)。

Pickering, Mary., 1993, *Auguste Comte: An Intellectual Biography vol.1*, New York, Cambridge University Press.

清水幾太郎, 1933, 『社会学批判序説』(『清水幾太郎著作集』第1巻, 3-237)。

———, 1935, 『社会と個人—社会学成立史—上巻』(『清水幾太郎著作集』第1巻, 239-514)。

———, 1939, 「シルレル」(『清水幾太郎著作集』第4巻, 402-409)。

- , 1940, 「歴史的精神」(『清水幾太郎著作集』第5巻, 177-190).
- , 1946, 「デモクラシーの流行」(『日本の運命とともに』, 1951, 河出書房, 16-31).
- , 1948, 『社会学講義』(『清水幾太郎著作集』第7巻).
- , 1949, 『私の読書と人生』(『清水幾太郎著作集』第6巻, 359-483).
- , 1956, 『私の心の遍歴』(『清水幾太郎著作集』第10巻, 233-421).
- , 1969, 「最終講義 オーギュスト・コント」(『清水幾太郎著作集』第11巻, 265-293).
- , 1970, 「コントとスペンサー」(清水幾太郎責任編集, 1970, 『世界の名著36 コント スペンサー』, 中央公論社, 5-46).
- , 1975, 『わが人生の断片』(『清水幾太郎著作集』第14巻).
- , 1978, 『オーギュスト・コント—社会学とは何か』(『清水幾太郎著作集』第18巻, 3-175).
- 清水幾太郎, 藤竹暁, 1985, 「インタビュー 初めて社会学文献に親しんだ頃」(現代社会学会議編『現代社会学』第20号, 203-213).
- 清水幾太郎, 高橋徹, 1970, 「社会学における歴史と人間」(清水幾太郎責任編集, 1970, 『世界の名著36 コント スペンサー』付録, 中央公論社).
- Simmel, Georg., 1892, *Die Probleme der Geschichtsphilosophie. Eine Erkenntnistheoretische Studie.*, 5. Aufl., Munchen, Duncker & Humblot, 1923, 生松敬三・亀尾利夫訳, 1977, 『歴史哲学の諸問題』(『ジンメル著作集1』), 白水社.
- 鈴木広, 1990, 「清水幾太郎私論」(日本社会学会編, 『社会学評論』第160号, 56-72).
- 高田保馬, 1919, 『社会学原理』, 岩波書店.
- 建部遯吾, 1898, 『哲学大観』, 金港堂書籍.
- , 1902, 『西遊漫筆』(『明治欧米見聞録集成』第25巻, 1989, ゆまに書房).
- , 1904, 『普通社会学』第1巻, 金港堂書籍.
- , 1941, 「社会学講座の創成」(日本社会学会編, 『年報 社会学』第8輯, 2-25).

付記

本稿は、早稲田大学2011年度特定課題研究助成費(新任の教員等)「清水幾太郎の思想史的研究: ジョン・デューイおよび周辺思想家との比較・検討から」(課題番号2011A-919)による研究成果の一部である。